

1
章

鳥獣被害の
現状

1

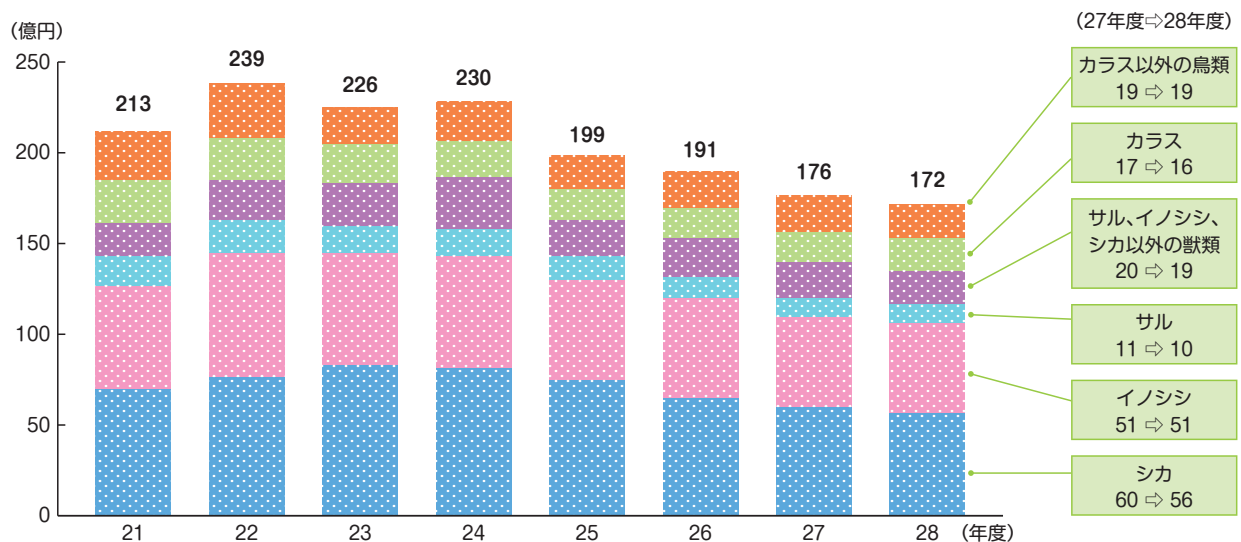
鳥獣被害の現状は

1 農作物被害は5年連続で減少傾向に

野生鳥獣による農作物被害額は、平成22年度の239億円をピークに、近年200億円前後で推移してきましたが、平成25年度以降、5年連続で減少し、平成29年度の農作物被害は被害金額で約164億円と、前年度に比べ約8億円減少（対前年5%減）しています。

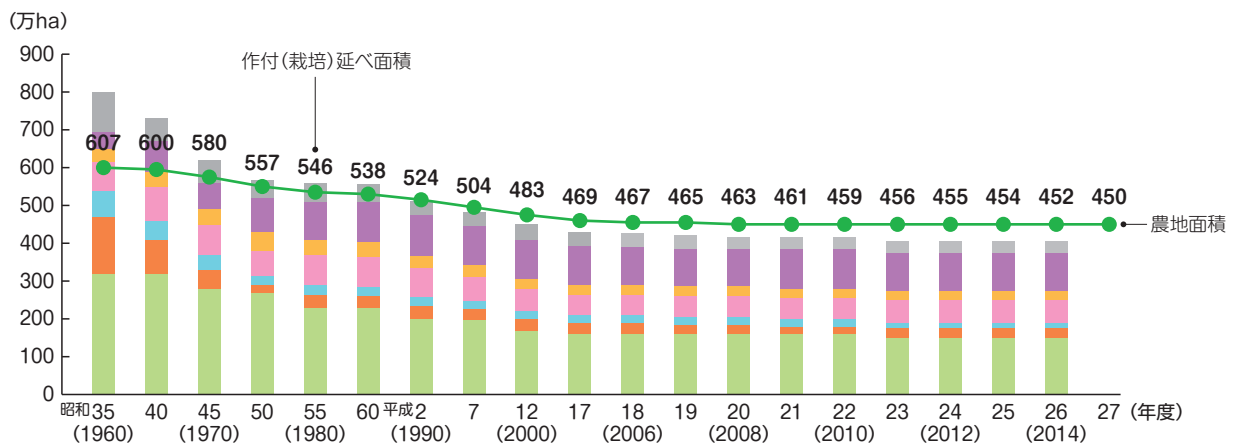
これを被害面積で見ると約5万3千haと、前年度に比べ約1万2千ha減少（対前年18%減）、被害量では約47万4千tと、前年に比べ約1万3千t減少（対前年3%減）しています。

農作物被害額および獣種別被害額の推移（平成21～28年度）



注1：都道府県からの報告による。
注2：ラウンドの関係で合計が一致しない場合がある。

農地面積等の推移



資料：農林水産省「耕地及び作付面積統計」

注：1) その他は、かんしょ、雑穀、工芸農作物、その他作物

■ その他 ■ 飼肥料作物 ■ 果樹 ■ 野菜
■ 豆類 ■ 麦類 ■ 水陸稲

2 シカ、イノシシ、サルの被害で全体の7割

主要な獣種別の被害金額については、全体の7割がシカ、イノシシ、サルとなっています。

平成28年度は、シカが約56億円で前年度に比べ約3億円減少（対前年5%減）、イノシシが約51億円で前年度に比べ約6千万円減少（対前年1%減）、サルが約10億円で前年度に比べ約6千万円減少（対前年5%減）しています。

3 近年、中型獣類による被害が増加

全体の被害が減少傾向にある中で、被害額や面積などはシカ、イノシシ、サルに比べて少ないものの、近年、ハクビシンやアライグマなど中型獣類による被害が増加傾向にあります。これまでよりも生活しやすい環境が広がり、最近では都市近郊部まで生息範囲を伸ばしていること、また、大型獣類の対策が進んだことによりこれまで見えていなかった被害の実態が明らかになったりしていることも原因のひとつです。

4 森林被害の8割がシカによるもの

一方、平成28年度の森林の被害面積をみると全国で約7千haとなり、このうちシカによる枝葉の食害や剥皮の被害が約8割を占めます。

水産分野での被害としては、河川・湖沼でカワウによるアユ等の捕食、海面ではトドによる漁具の破損等が深刻になっています。

5 数字に表れる以上に深刻な影響が

農山漁村の高齢化がすすむ中で、鳥獣被害は営農意欲の減退につながり、耕作放棄や離農の増加をもたらしています。さらには、森林の下層植生の消失などによって土壌が流出したり、希少植物が食害されたり、また車や鉄道車両との接触・衝突事故などの被害ももたらしており、被害額として数字に表れる以上に農山漁村に深刻な影響を及ぼしているのが現状です。

一方で、平成12年度から27年度の15年間で鳥獣害全体の被害金額は47億円以上減少していますが、その内訳を見てみると、鳥害の減少だけで55億円となっています。つまり15年間でイノシシとシカを合わせた捕獲頭数が100万頭ほど増加しているにもかかわらず、生息頭数が抑えられなかったこと等により獣類の被害金額は8億円増加していることとなります。



イノシシによるイネの被害

2

鳥獣被害が増える理由

1 鳥獣被害を引き起こす人間のエラー

近年、中山間地域を中心に鳥獣害が深刻化していますが、それらの地域や農地には意識や管理の点で共通する問題が見受けられます。野生鳥獣はその本能に従って、「安全」で「エサ」のある場所を探しており、この2つの条件がそろった場所は生きていくために価値の高い場所として認知され、被害が深刻化することになります。

理由① 人が被害と思わない「エサ」がある

集落を見回すと、稲刈りあとの「ひこばえ」や農作物を収穫したあとの残渣、管理者のいない柿の木など、野生鳥獣にとって立派な「エサ」となるものがたくさんあります。これらは「無意識の餌づけ」になっており、鳥獣被害の温床となっています。



放任果樹



ひこばえだけで反収60kgの例もある

理由② 「正しく」守れていない（囲えていない）

きちんと柵で囲っているつもりでも、野生鳥獣に対して効果を発揮していないことがよくあります。たとえば、圃場全体を囲えていなかったり、電気柵の高さがイノシシに効果がある地面から20cm間隔の高さになっていなかったり、下部に中型動物が楽々と侵入できるような空間が空いていたり、また設置したばかりのころは効果があっても、その後まわりの草が伸びて電気柵の線に触って漏電していたりと、柵の設置の仕方やその後の管理の仕方といった人的要因によって効果を減じている例が少なくありません。



きちんと囲われていない電気柵（全体を囲えていない）

理由③

隠れ場所がある

野生鳥獣に集落や農地を「安全」と感じさせるのは、農地の周辺にある耕作放棄地や管理不足の林縁、茂みなどの隠れ場所です。野生鳥獣がその姿を人にさらすことなく農地に近づける環境を与えていることになり、獣害を増やす原因の1つになっています。



農地周辺に安全な隠れ場所がある

理由④

正しく追い払えていない

サルに限った話ですが、集落全体で「効果のある追い払い」ができていないことも原因のひとつです。よく見受けられるのは、個人がバラバラに自分の農地だけを守るために追い払いを行うだけであったり、追い払う人が限られ、多くの人が見て見ぬふりをしていたり、農作物を食べられそうな時だけ追い払ったりすることです。これが続くと、サルが「人は怖い存在ではなく、少し隠れていれば最終的にはエサが食べられる」という学習をし、追い払いや人に強いサルになってしまう危険性があります。

理由⑤

正しい捕獲ができていない

シカやイノシシなど野生鳥獣の個体数が増加している地域が多くなっているのは事実で、それらを捕獲することは重要な対策のひとつです。しかし、捕獲頭数を増やせば良いわけではなく、実際に農地や林地などで被害を与えている個体を捕獲しなければ意味がありません。多くの地域では捕獲技術が不足していたり、防護柵で守ることなしにオリやワナを設置して捕獲しようとするところから効果的な捕獲ができていないことがよくあります。まずは防護柵でしっかり守り、農地に侵入できなくなった個体を捕獲することが原則です。



大型捕獲わなによる大量捕獲



